# ～鹿児島水産高校とともに行った藻場回復の取り組み～

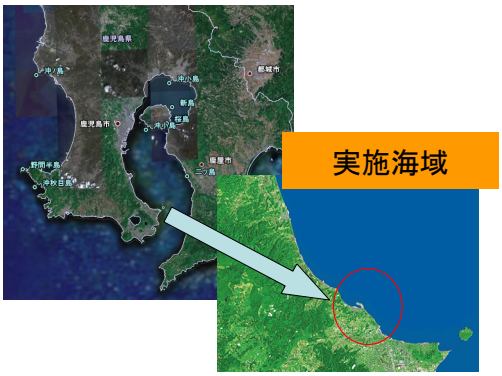
漁場環境部　　徳永成光，猪狩忠光，吉満敏

## 1　鹿児島県立鹿児島水産高校（以下「水産高校」）が参加した経緯

試験地の岩本沖は，1978年当時，鹿児島湾内最大のガラモ場で，アオリイカやサヨリなどの好漁場となっていたが，2000年代に入ると，藻場が確認できないほど衰退した。

漁協関係者が2003年から藻場の回復に取り組んできたが，主な藻場の形成阻害要因と考えられるガンガゼは，関係者だけでは除去できないほど大量に生息するようになっていた。一方，水産高校においては，『栽培漁業への有効利用』を目的に，潜水実習が行われていた。

このような中，漁協及び水産高校と県水産技術開発センター（以下「水技センター」）の3者連携による藻場回復活動を2005年から実施した。水産高校生がダイビングによるウニ排除，漁協関係者が母藻設置用資材（中層網）作製・設置と母藻調達，水技センターがプランニングと追跡調査，など3者が役割を分担して取り組んだ。



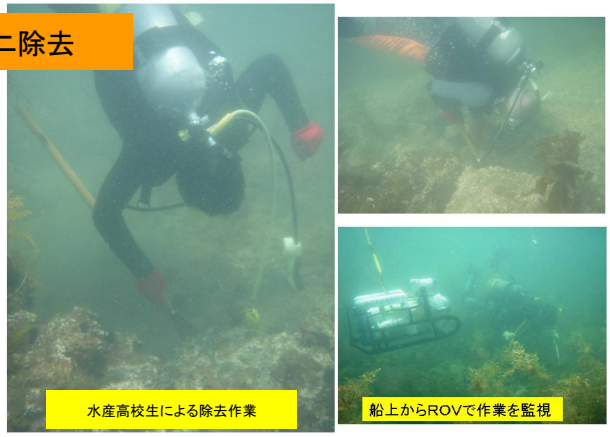
## 2　取り組みの方法と結果

ウニ除去は，作業1日あたり水産高校生，教諭，水技センター研究員の計15～20名がスクーバ潜水し，海中でウニを割り潰す方法で実施した。2005年の取り組み開始後，5カ年で延べ10日間実施し，合計6万個体以上のウニ類を除去した。

ウニを除去した海域には，5月から7月の期間に，ヤツマタモク等の母藻を取り付けた中層網（約2×18m）を設置して種苗を供給した。中層網設置場所周辺において，芽数が多く種苗添加効果が見られたと判断された範囲は，中層網1枚あたり1,300～1,600㎡に及び，7月下旬頃から芽が確認された。その後翌年5月には最長2m程度まで生長し，かつての規模には及ばないものの，藻場が形成され，アオリイカの漁獲量も増加に転じた。

なお，ウニ除去後2～3年が経過すると，ガンガゼが再び増加し，再度ウニ除去が必要になった海域も生じた。

水産高校生によるウニ除去

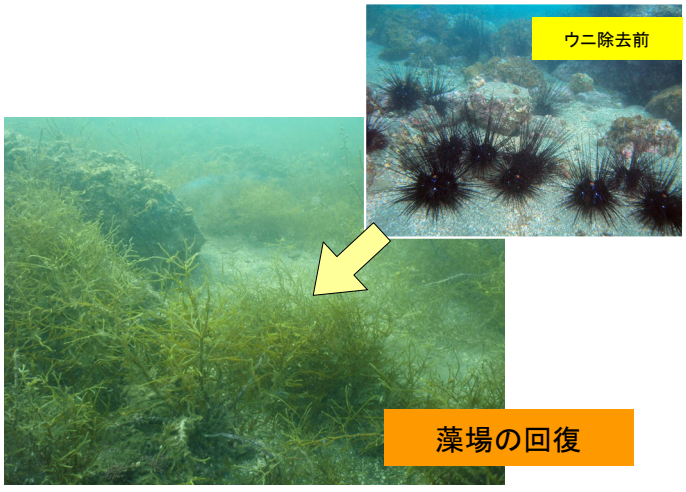



## 3　新たな取り組み

2009年から，除去の対象としているガンガゼの活用を目ざし，水産高校生による塩ウニの試作に新たに取り組んだ。これについては加工後の色調が良くない点等もあり，今後も活用策を検討する必要がある。

また，2008年からは肝付町高山地区において，指宿市岩本地区と同様，水産高校とともに藻場回復の取組を開始した。

## 4　まとめ

水産高校としては，単に潜水技術の習得だけでなく，地元社会に貢献でき，生徒がやりがいを感じる実習となっている。

また，毎年生徒が入れ替わるため，飽きることなく活動が持続でき，藻場回復活動の大きな戦力となっている。